ひとを育てる活動

現地パートナーとともに支えた先住民族の初等教育普及と専門家育成の活動 ― 始まりと実り ―

1996年に始まったCMB(現CMIP)と協働のビラーン他辺境の初等教育普及とカレッジ等奨学金支援

月額200円会費で始めた初等教育普及の活動

「５年生になる前に、親が決めた結婚のため中退する女児が多い。月100ペソで教育費支援をお願いできないか」

1996年７月の医療支援開始半年後に始めた教育支援。まずはアトモロック小のビラーンの女児10名程を、月200円の会費で支えました。その後も近くに公立がない辺境で、学校や学生寮の建設、教師の給与支援ほか、各種助成金も受けて続けたCMIP経由の教育支援。今年度もカレッジ及びハイスクール生計15名の奨学金のほか、厳しい通学環境の児童の就学意欲を支える給食支援も継続実施しました。

HANDSのあとは卒業生が後輩のコミュニティ活動を支えます！

元奨学生代表が集まると聞いていた年末、「４月の同窓会総会で、後輩の中等・高等教育を支える年会費1000ﾍﾟｿ徴収を決める」という報告が届きました。「会長と書記はそれぞれ公立小教師のエドインとメリアン、会計を元村議スヌーリア、広報は農業専門家ボニファシオ」等、総会に向けて役員も決めたようです。元奨学生同窓会の存在は以前から聞いていましたが、HANDSの支援終了を受けて、改めて後輩の教育を担う責任を自覚したようです。なお、前号で報告の元奨学生による地方選挙挑戦については「資金不足で全員落選」の報告がありました。

10年前、JOFPAから引き継いだチボリの子ども支援・SCM学校法人との協働

2013年のチボリ国際里親の会/JOFPA解散に伴い、継続支援を希望する一部会員の受け皿として、サンタクルスミッション学校法人/SCMSIとの協働を始めて約10年が経過しました。そして、当法人HANDSもまた解散に向けて準備を進めるにあたり、改めてチボリ民族の町レイクセブでのSCMSIと協働した日本の市民による教育支援を振り返ることにします。

カトリックミッションの活動から始まったチボリの教育普及の歩み

チボリをはじめとしてウボ、マノボなどの先住民族の居住地レイクセブにおいて、1960年代初め、布教と支援のため派遣されたアメリカ人神父によるSanta Cruz Mission /SCMの設立、初等教育施設の拡充は、1980年に藤原輝男氏がJOFPAを創設、日本の市民による支援が始まったことで急速にその数を増やし、最盛期の1990年代初めにはレイクセブ近隣を含めて26校に上りました。

先住民族の教師育成のためのカレッジ部門の拡充で、小学校をはじめハイスクール、さらにカレッジの教師は、当初の入植者(クリスチャンフィリピノ)から、順次SCM校で学んだチボリ人に代わりました。1990年代半ばには、チボリ民族のマリア・ガンダムさんが学長職に就き、昨年、副学長職に退くまでその重責を果たしました。カレッジも当初の地域開発科に続いて初等教育科、さらに観光科が増設され、レイクセブ町唯一の高等教育機関として専門家育成を担っています。一方で、初等教育については、公立小学校が増えて今はラヒットとレムエヘック２校がチボリの伝統を繋ぐ学び舎として残っています。

精神的里親方式の採用と成果

「学校を増やす、教師を雇う」資金確保と子どもの学ぶ意欲維持のため導入されたJOFPAの「精神的里親」方式は確かな実を結び、40年余を経た今、里子の父母職業欄からも、教育を受けた親世代の多くは、教師、公務員、レイクセブ湖畔のホテル従業員他一定の収入があると推測しています。外部カレッジ進学を除けば奨学金のニーズは少ないと考えています。

今も毎週月曜日は教師生徒ともに民族服着用となっているSCMSI。９月開催の創立記念祭（レムルナイ）や卒業式などでの民族服着用、チボリダンス披露など、SCM校はレイクセブに公立校が増えた今も、また、これからも民族文化継承の貴重な砦といえるでしょう。

2年前2021年度SCMSIレムエヘック・ジュニアハイスクール卒業式

なお、長く学長職にあり、又、町長だった夫(暮れに急逝)の町政サポートで多忙だったガンダムさんからは、12/10付で、クリスマスメッセージとともに、Xmasギフトや各種チボリの子どもへの長期支援に対する感謝の言葉をいただきました。

その他の小規模教育支援 ― 医療従事者育成(PIHS)、辺境の初等教育普及(ILS)、あしながカレッジ生支援(TBA) ―

PIHS経由で支援の医療専門家の育成

コミュニティ活動支援に始まるPIHSとの協働は、助産師等医療分野の人材育成のニーズに応えて奨学金事業にも拡大しました。しかし、需要が多い医療スタッフの場合、前号で国家試験合格と報告のモナリサを含めて、家族や親族を支えるため、より高い給与を求めてPIHSを去るケースもありました。一方、すでに病院研修を終え卒業式を待つ最後の奨学生、臨床検査技師ザイラについては、母親ナプサさんの片腕として、助産所を支えてくれることと期待しています。

クリスマスギフトありがとう！

小さな支援が大きく実ったILS

レイクセブ町の辺境ティヌオスで就学前と初等科１年の教育を担う先住民族学校。私たちの数年間のささやかな支援一つひとつを豊かな実りにかえてくれました。

TBA とともに支援のあしながカレッジ奨学生

数年前からボルールの住民組合TBAに引き継がれたカレッジ奨学金。中退事例が続きましたが、現奨学生２名はいずれも家庭の事情で学業を中断したケースで、５月には無事卒業の予定です。ともに育んできた幼稚園教師の夢がかなう日も近いと期待しています。